

日本宗教学会第 72 回学術大会

パネル発表要旨集

日時・会場

平成 25 (2013) 年 9 月 6 日 (金) ~ 8 日 (日) パネル発表は 7 日 (土) と 8 日 (日) の午後
 國學院大學渋谷キャンパス (東京都渋谷区東 4-10-28)

開催パネル一覧

日	部会	教室	パネル題目	代表者
7	1	1101	宗教の公共性とは何か—国家神道から考える—	磯前 順一
	3	1103	修験道研究の回顧と展望	鈴木 正崇
	5	1201	近代日本仏教史のターニング・ポイント	林 淳
	7	1203	水子供養研究の達成と課題	清水 邦彦
	8	1303	妙好人における無対辞の思想	吾勝 常行
	10	博物館	聖なる場としての伊勢神宮—その聖性を考える—	遠藤 潤
	13	1403	「無縁社会」における宗教の可能性について—釜ヶ崎の事例から—	宮本要太郎
	14	1404	フェミニスト人類学がまなざす女性の宗教的实践	川橋 範子
8	1	1101	宗教概念／宗教研究のグローバル化に関する比較研究	鶴岡 賀雄
	2	1102	東洋の宗教思想と井筒俊彦	澤井 義次
	3	1103	ファシズム期における古代理解	深澤 英隆
	4	1104	宗教研究における講究の意義と可能性	森 悟朗
	5	1201	生殖をめぐる問題と宗教—日中韓の事例から—	小林奈央子
	6	1202	史料から見た近世・近代移行期の神職	山口 剛史
	7	1203	近現代日本の民間精神療法の展開	塚田 穂高
	8	1303	雑誌メディアからみた近代宗教史	大谷 栄一
	9	1304	浄土真宗におけるソーシャル・キャピタル	長岡 岳澄
	10	1306	宗教表象論再考—近現代日本における表象主体／客体の検討から—	茂木謙之介
	11	1401	こころの医療と宗教—慈悲と支配をめぐる—	戸田 游晏
	12	1402	神道の中世的展開を考える	佐藤 真人
	13	1403	公共空間で心のケアを提供する宗教者の養成とその課題	谷山 洋三
	14	1404	過疎地域における宗教ネットワークの可能性—三重県を事例に—	川又 俊則

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載しています。

宗教の公共性とは何か—国家神道から考える—

神道と公共性	磯前 順一	(国際日文研)
植民地朝鮮の国家神道	青野 正明	(桃山学院大)
明治神宮の「道義」概念	姜 海守	(啓明大)
国家神道と公共性	島菌 進	(上智大)
コメンテータ :	川村 覚文	(東大)
司会 :	磯前 順一	(国際日文研)

本パネルは宗教における公共性の問題を論じるものである。宗教概念論の登場以来、宗教を私的領域に限定するプロテスタント的な理解が欧米の局所的なものであり、決して普遍的なものではないことが確認された。しかし、その反省から今度は一転して、宗教の公共性が称揚されるようにもなった。特に、東日本大震災での諸宗教団体のボランティア活動は、宗教の公共性を印象づける格好の機会となった。その一方で、神社界からは、時に神道こそが日本の公共性を担うにふさわしいものであり、あまり政教分離に拘泥しないほうがよい、あるいは神社を非宗教=文化領域に属するものと認定すればよいという見解も出されるようになった。それに対して、やはり政教分離に基づき、宗教を私的領域に限定したほうがよいという見解も、戦前の国家神道体制を反省する立場から提起されている。

このような今日の宗教公共性論をめぐる理解は、一方で諸宗教団体のボランティア活動、もう一方で戦前の国家神道の記憶という両極を含むために、宗教の公共性にどのように向き合えばよいものなのか、その研究者達に大きな困難をもたらすものとなっている。そこで、本パネルでは主題を国家神道および戦後の神道論に絞り込み、そこにおける宗教公共性の諸問題を具体的に検討する。もはや宗教概念論を暗黙の前提にして、政教分離を批判し、公共宗教の復興を唱えればよいという理解では、現実には起きていないことに対応できないのが日本社会の現状であろう。

本パネルでの一番大きな問題提起は、そもそも「公共性」あるいは「公益性」という言葉が何を意味するかということである。このことについて、まずこれらの言葉とハンナ・アレント論じる「公的領域/私的領域」さらに「社会的領域」の概念との関係性をふまえた上で、ジョルジョ・アガンベンによる公私二領域の「不分明地帯」を通した「生政治」の議論と、さらには社会権を排除された「剥き出しの生」という視点をとり込みつつ、神道という具体例を通して検討していきたい。二番目の問題提起としては、このように「公

共領域/私的領域」の定義を再吟味するなかで、「宗教/世俗」という二分法もまた疑問を付されるだろうということである。今日の公共宗教論は、宗教という概念もまた公共性と同様に再吟味されないまま、かつての意味合いを公共領域へと拡大した概念として無批判に使われている。もし、宗教が私的領域のみに限定されないとすれば、宗教という概念もまた公共領域の世俗性と深く接触するなかで変容せざるを得ないはずである。さもなければ、世界各地で起きている原理主義的な宗教復興こそ、そのような世俗主義を前提とした空間での公共宗教論の回帰するひとつの行き先であると見なされるべきであろう。

以上の点をふまえ、本パネルではまず磯前順一が、「神道と公共性」をめぐる全体の問題を概観する報告を行う。次いで、青野正明が「植民地朝鮮の国家神道」として、植民地における神社の公共性のあり方を排除と包摂の問題から論じる。そこでは、神道=民族宗教という戦後の理解自体が問題に付されるだろう。三番目に姜海守が「明治神宮の「道義」概念」として、「国民にとっての鎮守の森」論を唱える戦後の明治神宮の公共性論を検討する。そこでは「道義」という一種の公共性をめぐる概念が、「宗教/道徳」の二分法を脱臼させるものとしてどのような役割をはたしていたのかが明らかにされる。そして、島菌進が「国家神道と公共性」として、戦後における神道と公共性の関係を「宗教」概念の変動を視野に置きつつ論じる。そこで、政教分離の意義と宗教の公共性という一見相いれない問題がどのように接合されていくべきかが考察される。そして、最後に川村覚文がコメンテータとして、公共性とは何か、そして宗教と公共性はどのように関係づけられるべきかを理論的に考察する。

修験道研究の回顧と展望

代表者： 鈴木 正崇

和歌森太郎の修験道研究とその発展・展望—宗教史の立場から— 関口真規子 (埼玉県立文書館)

岸本英夫・堀一郎の修行論—宗教学の立場から— 長谷部八朗 (駒大)

五来重の山岳信仰・修験道論—宗教民俗学の立場から— 鈴木 昭英

修験道は民族宗教か?—宗教人類学の立場から— 鈴木 正崇 (慶大)

コメンテータ： 宮家 準 (慶大)

司会： 鈴木 正崇 (慶大)

修験道の研究は宗教学・民俗学・地理学・歴史学など様々の分野から繰り広げられてきた。戦前では、宇野圓空、村上俊雄、和歌森太郎、岸本英夫など、戦後では堀一郎、村山修一、五来重、宮家準、鈴木昭英、宮田登、宮本袈裟雄などにより、日本の宗教文化の核になるものとして注目され、教義と実践の双方から研究されてきた。また、各地の修験道については、羽黒山の戸川安章、彦山の長野覚などが地域に密着して考察を進めてきた。その後、『山岳宗教史研究叢書』の刊行や、日本山岳修験学会による研究の組織化を通して、各地の霊山の研究も深化した。学会の機関誌『山岳修験』も通号で50号に達して、大峯山・彦山・出羽三山などに留まらず、各地の霊山の実態と変化が明らかにされた。特に、宮家準は『修験道儀礼の研究』『修験道思想の研究』『修験道組織の研究』の三部作と、『大峯修験道の研究』を著し、2012年には『修験道の地域的展開』を刊行して集大成を行い、研究水準を飛躍的に高めると共に、修験道研究という分野を確立することに貢献した。

修験道や山岳信仰の研究に関しては幾つかの課題があり、整理してみた。①山岳信仰が民衆社会に浸透していく様相を修験道と関連付け、特に民間習俗の変容に着目して明らかにすること、②近世の民衆の間で盛んになった山岳登拝の講集団に注目して、その機能や展開を信仰圏も含めて考察すること、③修験道教団の儀礼・思想・組織を体系的に論じること、④本山派や当山派の成立と展開を史料に基づいて検討して、教団の組織史として研究すること、⑤山岳信仰と修験道の歴史的展開を山岳考古学の立場から論じ、遺跡や史料に基づいて明らかにすること、⑥霊山に伝わる縁起の読み解きと地域化・土着化を論じること、⑦政治権力と寺社勢力、政治と宗教の葛藤・衝突・融合の諸相を、山岳信仰や修験道を通じて考察すること、⑧修験道から新宗教への展開を解明すること、⑨近代の神仏分離以後の修験道の復興や各教団の動きを解明すること、⑩修験道が民俗芸能や口承文芸、唱導に果たした役割

を論じること、⑪文化遺産や文化的景観などの文化財化がどのような影響を及ぼすか、特に地域おこしや観光化、エコツーリズムとの関連を考えると、⑫スピリチュアリティやパワースポットなど現代の靈性文化と修験道の関係を問うこと、⑬広くアジアの山岳信仰研究の中に位置付けることなどである。

本パネルは、修験道研究の成果を批判的に考察する。特に研究に画期をもたらした代表的な研究者の学説を再検討し、今後の修験道研究の可能性を探りたいと考えている。パネリストとして、関口真規子は宗教史学の立場から和歌森太郎を、長谷部八朗は宗教学の立場から岸本英夫と堀一郎を、鈴木昭英は宗教民俗学の立場から五来重を論じ、鈴木正崇は宗教人類学の立場からアジア研究との接合を考えることにする。宮家準はコメンテーターとして、先学の研究の総括と今後の課題について問題提起する。修験道研究の今後の在り方を総合的に考えて、将来に向けての研究課題を明らかにすることを目的とする。

近代日本仏教史のターニング・ポイント

代表者： 林 淳 (愛知学院大)
林 淳 (愛知学院大)
岡田 正彦 (天理大)
オリオン・クラウタウ (ハイデルベルク大)
江島 尚俊 (大正大)
コメンテータ： 谷川 穰 (京大)
司会： 林 淳 (愛知学院大)

「人別」から「教化」へ
大教院離脱と須弥山説—花谷安慧『天文三字経』を読む—
仏教公認運動・再考
宗門系大学の成立—宗乗から宗学、そして仏教学へ—

21世紀になってから近代仏教の研究状況は目覚ましい展開をとげている。本来、地味でマイナーな領域であるはずの近代仏教に、急にスポットがあたりはじめてのは、なぜなのか。この領域は、仏教学者の余技か、宗学者のなかでも近代の資料を扱う研究者の特殊分野と見られていたのが、最近の傾向は、宗教学、社会学、日本史学などの研究者が進出し、新しい視角から近代仏教に切り込んでいる点である。かれらは、おおむね「仏教」よりも「近代」に関心を持っていることが一つの特徴である。換言すれば、今日の研究者は「仏教」を通して「近代」を問い直そうとしている。もう一つの特徴は、海外から来た研究者が大活躍している点である。さらに韓国、中国、欧米において近代仏教を専攻している研究者との交流も、盛んになっている。テーマは多岐に分かれるように見えながらも、学知としての仏教学の確立、教育と仏教、神智学の流行、仏教改革運動、1893年のシカゴ万国宗教者会議、植民地主義の拡大、「近代」の定義などが、繰り返し問われ続けている。あえて単純化すると、近代仏教の研究の魅力は、対象と研究者側の双方にあるトランスナショナルな志向性と、流動的な相互関係性にあると言える。

本パネルは、新しい潮流の研究動向と比較すると、すこし時代遅れの感がある近代仏教の時代区分論を振り返るものである。このことを最初に主題化したのは吉田久一であった。吉田は、講座派歴史学の成果を参照して、近代仏教史の時代区分論・段階論を提示した。明治維新で絶対主義が確立して、原始蓄積期、資本主義の成立、帝国主義の展開という段階を経ていったと考えて、近代仏教史も「明治維新」「資本主義」「帝国主義」の段階に分けている。吉田の仕事は、当時の日本史学との関係で見れば、段階論と実証性をもった確固とした労作であったが、それ以降、近代仏教史の時代区分は語られることはなくなった。吉田以降、日本史学への対応を模索する人がなかったとも言えるが、日本史学の方でも段階論が消えたことが何よりも大き

い。本パネルは、個々の研究者が、近代仏教史におけるターニング・ポイントをどこに見ようとしているか、そのポイントの前と後で何が変化したのかという具体的な事実をもとに近代仏教史を構築しようとするものである。複数のターニング・ポイントの提示と、その相互関係を捉えなおしてみたいと考えている。この試みは、時期区分論の復活ではなく、ターニング・ポイントを議論することで、研究者間の共通理解の幅を広げることを目的とする。

林淳「人別」から「教化」へは、権力が僧侶に要求した社会的な役割の変化に注目して、そこに近世から近代への宗教史の転換を探ろうとする試論である。岡田正彦「大教院離脱と須弥山説」は、須弥山説を説く僧侶による平田派国学批判があったことを検証し、あわせて1876年の須弥山説停止の理由を再考する。オリオン・クラウタウ「仏教公認運動・再考」は、帝国憲法発布前後から1899年の第一次宗教法案否決までの間におこった仏教公認運動を対象にして、近代における政教関係の言説を検討する。江島尚俊「宗門系大学の成立」は、僧侶養成のカリキュラムと「宗学」をめぐる議論をふまえて、大学令の認可による宗門系大学の成立によって、「宗乗」に代わって「仏教学」が設けられ、そこに近代仏教の質的な変化があったことを論じる。このように複数のターニング・ポイントが提示されるが、その優劣と大小を競いあうのではなく、それらの相互関係性を問い直し、研究の水準を披露することがパネリストに課された大事な課題である。

水子供養研究の達成と課題

代表者： 清水 邦彦

水子供養研究の今日的課題—前近代との連続性を中心に— 前川 健一 (東洋哲学研究所)
ジェンダー・セクシュアリティの観点からみた水子供養 猪瀬 優理 (龍大)
新型出生前診断と妊娠中絶 清水 邦彦 (金沢大)

コメンテータ： 木村 文輝 (愛知学院大)

司会： 前川 健一 (東洋哲学研究所)

水子供養は、1970年代の日本において顕在化し、今日ではすっかり定着したように見える。また、近年では韓国・タイなど仏教圏の他、アメリカなどでも同様の儀礼の定着が報告されるようになってきている。

水子供養は、主として人工妊娠中絶によって母体外に排出された胎児に対する供養である。人工妊娠中絶そのものは、古代以来、世界各地で、様々な仕方で行われてきたものであるが、それが生命をめぐる問題として先鋭化したのは近代になってからと言ってよいであろう。胎児が可視化されて始めて、その「死」をどう解釈するかという問題が浮上する。その意味で、水子供養はきわめて近代的な現象である。しかも、それは単に宗教(仏教)儀礼の目新しい展開というにとどまらず、医療・ジェンダー・セクシュアリティ、さらには宗教の商業主義やオカルトなど多くの問題が絡み合った結節点である。

日本の宗教研究においては、少数の重要な研究はあるものの、必ずしも水子供養への関心は高いとは言えない。しかし、西洋(特にアメリカ)においては、水子供養については大きな関心が寄せられてきた。とりわけ、William LaFleur, *Liquid Life* と Helen Hardacre, *Marketing Menacing Fetus in Japan* は、それぞれの仕方水子供養を大きな思想史的脈絡に位置づけた金字塔的著作である。LaFleurが、水子供養を日本の死生観・児童観の歴史の中に位置づけ、胎児に対する倫理的対応として、一定の意義を見出すのに対して、Hardacreはジェンダー論の観点を踏まえて、水子供養の中に男性中心主義的心性を見出し、その商業主義を強く糾弾している。両者の議論についてはそれぞれ既に問題点が指摘されており、さらに両者を含め外国人研究者の議論がある種のオリエンタリズムに陥っていることも否定できない。また、その後の研究の進展により、事実認識の上で訂正を必要とする点も少なくない。とりわけ、両者が共通の前提としている近世の生殖観・児童観については研究の進展が著しく、日本の伝統的な児童観とされてきた「七歳までは神のうち(七歳までは社会的に「人間」と認知されておらず、「お返し」することも許容される)」という認識についても重大な疑

義が提示されている。

以上のような状況をふまえ、LaFleur と Hardacre を批判的に乗り越え、水子供養についてのトータルな認識を提示することは、とりわけ日本の宗教研究にとって大きな課題であり、生殖をめぐる生命倫理に対しても日本から重要な貢献をしようの領域と考える。本パネルでは、上記のような観点から、従来の水子供養研究を総括し、特に Hardacre の所論を批判的に乗り越える視点を提示したい。

発表者のうち、前川は従来の研究史を総括し、水子供養が中世・近代の死生観や児童観と連続的であるのか否かという点を中心に論点を整理する。ここには、戦後日本における優生保護法による実質的な人工妊娠中絶の合法化をどのように評価するかという問題も含まれる。近年の研究成果を踏まえ、水子供養の歴史的位置付けを行うための基本的枠組みを提示したい。

猪瀬は、ジェンダーおよびセクシュアリティの観点から、水子供養という儀礼が生み出された背景にある社会的・文化的な要因について検討・考察する。胎児や新生児、生殖にかかわる現象、問題についての議論においては「女性」に焦点を当てられることが多かったが、「男性」のかかわりについても重点を置いて論じたい。

清水は、妊娠中絶数が、1970年代以降減少しつつあるも、新型出生前診断の導入により、新たな妊娠中絶が生ずる可能性を、マスコミの論述等より提示する。新型出生前診断によって、「胎児」が排除されるのであれば、「胎児」は命あるものと認識されていないのであろうか。

木村からは、仏教学・生命倫理学の観点から、現役の僧侶としての立場もふまえ、総括的にコメントを行う。

妙好人における無対辞の思想

	代表者：	吾勝 常行	
妙好人の無対辞思想		菊藤 明道	(成美大)
浄土真宗と妙好人—無対辞思想との関わり—		林 智康	(龍大)
妙好人を無対辞の境地へ導いたもの		藤 能成	(龍大)
ヨーロッパの妙好人と「無対辞」の思想		那須 英勝	(龍大)
妙好人の認識の在り方と世界観—無対辞による苦しみの超越—		中尾 将大	(大阪大谷大)
	コメンテータ・司会：	吾勝 常行	(龍大)

浄土教と心理学という課題に学際的観点から取り組む5名の研究者が「妙好人における無対辞の思想」をテーマに応用倫理学、真宗教義学、比較宗教学、宗教文化史、行動心理学等、各専門分野の立場から発表を行う。妙好人とは、もと浄土真宗の土徳に育まれた市井の念仏篤信者への讃辞であるが、鈴木大拙や柳宗悦らに評価され紹介されたことにより、今や宗派をこえて関心を集める宗教現象の一つと捉えることができる。無対辞とは対立概念を持たない言葉の意で、最晩年の柳が東洋的思索として妙好人研究に見出し得た、和の実現をめざす思想として注目される。今なぜ妙好人なのか、その底流をなす無対辞の思想に着目しつつ多面的に発表する。発表者のテーマと発表要旨は以下の通り。

1、菊藤明道：妙好人の無対辞思想

「妙好人」とは、本来は『観無量寿経』に見える、釈尊が念仏者を讃えた「分陀利華」(白蓮華)に由来する語である。それが近世中期以降、浄土真宗の篤信者を讃える言葉として用いられるところとなった。やがて彼らの思想が世界的禅学者鈴木大拙や日本民藝運動の創始者柳宗悦によって高く評価され、平和実現に寄与する思想として世界に紹介されたのである。「無対辞」とは、柳の思想の到達点と見られる最晩年の論文「無対辞文化」に出る言葉で、「対立概念を持たない言辞」を意味するが、いま改めて妙好人の思想について検討し、人間の在り方を見直すと共に、現代の深刻化する対立・抗争を乗り越える途を提示したい。

2、林 智康：浄土真宗と妙好人—無対辞思想との関わり—

浄土真宗では、篤信の念仏者を妙好人と言われる。『観無量寿経』に念仏者は分陀利華(白蓮華)として、泥中に清浄な華を咲かせると述べるように、念仏者も煩惱具足の凡夫でありながら、阿弥陀仏の誓願によって生死を超える道を力強く歩む真仏弟子と讃えられる。念仏者の嘉誉として「妙好人」の言葉が広まったのは、後世の『妙好人伝』の刊行による。順縁・逆縁の中、

妙好人がどのようにして育てられたかを無対辞思想をふまえて考察したい。

3、藤 能成：妙好人を無対辞の境地へ導いたもの

妙好人達が分別・対立を超えた「無対辞の境地」に等しく至ることができたのは、阿弥陀仏の本願力を信じ、念じ、称名する信仰生活の積み重ねによってであろう。彼らは本願力の促しの中で、我執と自己中心の欲望の束縛から放たれ、「個と全体が一体であり、すべてが一つに繋がり合い、等しく大切にされる宇宙の実相・真実」に容易に触れることができた。その真実なる世界のあり方を基盤として「無対辞なる思い、語り、行い」が成立するのである。

4、那須英勝：ヨーロッパの妙好人と「無対辞」の思想

戦後のドイツにおいて欧州初の真宗協会を結成したハリー・ピーパー師は、欧州の念仏者の中で妙好人として慕われている。ピーパー師は、海外で親鸞思想に関心を持つ他の仏教徒とは異なり、一度も来日せず、ドイツ語と英語を通して親鸞の思想を理解し語り伝えた。ピーパー師が妙好人と慕われる宗教的人格を形成し得たのは、柳宗悦的に言えば、日本語や日本文化という「対辞の世界」の果てた状況で親鸞の思想に向き合ったからではないだろうか。

5、中尾将大：妙好人の認識の在り方と世界観—無対辞による苦しみの超越—

我々は日常生活の中で様々な苦しみに遭遇する。苦しみは自己の快・不快、利益・不利益を基準として、「物事を分別する」という認識の在り方に原因があると考えられる。例えば「健康」は自己にとって好ましいことだが、「病」は好ましくないであろう。本発表では俗生活にあって、真宗の教えにより深い精神的境涯に達した「妙好人」といわれる人々の「無対辞による智慧」を紹介し、現代人が人生の苦しみを「超越」してゆく術を報告する。

聖なる場としての伊勢神宮—その聖性を考える—

代表者： 遠藤 潤

考古学から見た神宮の祭式と神宝 笹生 衛 (國學院大)

鎌倉時代における僧徒の参宮と神道説の形成 伊藤 聡 (茨城大)

伊勢参宮と神宮の聖地性—宮域と町と参宮者の信仰と意識— 櫻井 治男 (皇學館大)

コメンテータ： 加瀬 直弥 (國學院大)

司会： 遠藤 潤 (國學院大)

本年10月、伊勢の神宮では遷御が行われる。神宮は皇室の崇敬はもとより、歴史上さまざまな人々の信仰の対象となってきた。20年に一度神殿を造替する遷宮を行う神宮を考えようとするときには、神殿の聖性のみならず、神宮の〈場〉としての聖性の問題を避けて通ることはできない。神宮はなぜ、またどのようにして聖なる場として人を惹きつけてきたのか。本パネルではこの課題について、関係諸学の観点から神宮や伊勢という地について多角的に考察し、この場の持つ聖性の淵源について光を当てたい。

一般に、神聖なる場所である聖地には、タブーとされた自然の場所、自然の場所に人為を加えた空間、人工物、信仰の歴史と物語に関わる場所などが含まれるが、いずれもその〈場〉そのものが何か聖なる性質を持つとされている点は共通している。伊勢の神宮は、このような観点から見れば聖地としてとらえることができる。

また、宗教に関する建造物では、信仰的信念ゆえに建物自体の永続性が求められる場合が少なくないが、神宮においては遷宮に際して造替が行われ、そうした永続性には価値が置かれぬ。ただ、その一方で神宮の位置は動かされず、その点でも神宮の〈場〉そのものに聖性の何らかの淵源が求められることになる。

このパネルでは、そのような神宮の〈場〉、また伊勢という〈場〉の持つ聖性について、いくつかの角度から検討を進める。視点としては、神宮という〈場〉が伊勢に定められたことの意味を祭祀考古学の観点から考察する。とともに、神宮のもつ〈聖性〉について、それが歴史のなかで人々の神宮への働きかけのあり方と深く関わりながらさまざまな姿を示したという認識に立ち、参宮を焦点としつつ、事例分析にもとづいて論じる。

笹生は「考古学から見た神宮の祭式と神宝」という題目で、『皇太神宮儀式帳』の祭式・祭具・神宝と、5世紀～9世紀頃の祭祀遺跡・祭祀遺物を比較し、古墳時代祭祀との関係との関係を中心に、祭祀の系譜や年代的な問題について考える。

中世には、仏教による伊勢神宮に関わる神道説が形成・展開され、仏教者による神宮への参詣が盛んに行われるようになった。この側面もまた、歴史的に振り返ったときには、伊勢神宮の信仰史の一面をなすものである。伊藤は「鎌倉時代における僧徒の参宮と神道説の形成」という題目で発題を行い、神宮が仏教・仏教者にとって、どのような信仰的意味をもっていたのかという点を探る。

櫻井は「伊勢参宮と神宮の聖地性—宮域と町と参宮者の信仰と意識—」という題目のもと、参宮者の「神宮」への意識や態度と、迎え入れる側である宮域の人々（御師や御師をかねる神職）ならびに町の人々の信仰・意識の関わりや重なりについて発題を行う。

これら3名の発題を受けて、コメンテータである加瀬が、神宮およびそれ以外の神社の〈場〉の問題にふれつつ、コメントを行う。

さらに、このような発題とコメントをふまえて、パネラー相互の議論を中心としたディスカッションを進める。

なお、このパネルは大会実行委員会関連パネルとして企画されたものである。國學院大學博物館における多目的スペースを会場として実施し、展示スペースでの展示資料なども活用しながら議論を進行する予定である。

「無縁社会」における宗教の可能性について—釜ヶ崎の事例から—

代表者： 宮本要太郎

釜ヶ崎の地域史における宗教の位置づけ 白波瀬達也 (大阪市立大)

釜ヶ崎における韓国系キリスト教会の支援活動 中西 尋子 (関西学院大)

釜ヶ崎における天理教の活動—その歴史と現在— 金子 昭 (天理大)

「無縁社会」と宗教者の接点としてのライフストーリーについて 宮本要太郎 (関西大)

コメンテーター： 稲場 圭信 (阪大)

司会： 渡辺 順一

本パネルの構成メンバーは、科学研究「無縁社会における宗教の可能性に関する調査研究」に従事してきている。この研究の主たる目的は、今日の日本社会において宗教者や宗教団体などによって実際に行われている社会活動の実態を把握し、その背後に働いている動機や理念を明らかにすること、これらの活動に参画している人々が抱えているディレンマを明確にしつつ、それらをどのように克服してきたかを跡付けること、そして、社会活動を行っている宗教者たちを個別に取り上げるだけでなく、現場の宗教者たちの間の、さらに宗教者以外の団体や地域住民などの間の、信頼関係に基づくネットワーク構築の可能性を探ることである。かかる課題意識を共有してパネルのメンバーは、平成23年度以降、主に釜ヶ崎を中心に、平安な生活から疎外された(すなわち「無縁社会」を生きざるをえない)人々に寄り添い、連帯し、共生しようと続けられている活動の実態を調査するとともに、彼らのライフストーリーにおける信仰と社会活動の有機的連関を描き出そうと努めてきている。

釜ヶ崎は、こんにちの日本社会が抱える貧困を如実に物語っている。この街には、職だけでなく、住居も健康も、そして家族との絆も失った人々が集まって「無縁社会」を構成している。ここはまた、キリスト教をはじめいろいろな宗教的バックボーンを有する人々がそれぞれの思いを胸に抱いて貧困者の支援に取り組んでいる場所でもある。したがって釜ヶ崎を一つのフィールドとして、この地域と宗教との関係を通時的・共時的に明らかにしていくことは、地域社会における宗教の社会貢献の可能性を探る上で、重要なケース・スタディーとなる。

釜ヶ崎をはじめ、野宿者(ホームレス)が多く集まる地域では、主に社会福祉のニーズやその実効性などを明らかにするため、該当者たちに対する聞き取り調査が繰り返し実施されてきた。本研究は、支援される側よりもむしろ支援に従事する側からの聞き取り調査を重視しているが、それは、宗教的な動機によって炊

き出しや夜回りなどの野宿者支援活動に携わっている人々の世界観・人間観・社会観などを探るとともに、それらの活動によって支援者たちの意識がどのように変容したかを明らかにし、信仰と社会活動の間の葛藤、変わらぬ現状に対する焦燥感、信仰の変容などを抽出・分析することが、社会貢献における宗教(者)の可能性を論じるためにも不可欠だと考えるからである。

方法論的な観点からいえば、活動の実態を明らかにするという目的に従い、現場において実際に活動を展開している宗教者に直接インタビューするという手法を重視している。われわれの聞き取り調査では、それらの宗教者の「ライフストーリー」を聞き取る(共有することによって、調査の質的研究としての精度を高めるための試行錯誤も重ねてきているが、本パネルでは、そこから見えてきた方法論上の課題についても論じる予定である。

第1発表者の白波瀬は、「釜ヶ崎」という場のもつ特異性と歴史、およびこの地域に焦点をあてて調査研究することの意義を明らかにする。

第2発表者の中西は、釜ヶ崎を中心に活動を展開しているキリスト教のうち、とりわけ韓国系キリスト教会の事例を紹介しながら、その可能性と問題点を分析する。

第3発表者の金子は、釜ヶ崎をめぐる天理教の活動を取り上げて、その歴史やディレンマに関する考察を通じて、「無縁社会」における宗教者の活動の課題について論じる。

第4発表者の宮本は、宗教者の社会活動の実態を明らかにしつつその問題点と可能性について論じるための、「ライフストーリー」の方法論的枠組について考察する。

フェミニスト人類学がまなざす女性の宗教的実践

代表者： 川橋 範子

イントロダクション—解釈の枠組み—

川橋 範子 (名古屋工業大)

エジプト女性の宗教実践にみる「自己承認」

嶺崎 寛子 (愛知教育大)

インドにおける断食と自己犠牲のポリティクス

松尾 瑞穂 (新潟国際情報大)

「出家」を問い直す—ミャンマー女性の宗教実践の事例から—

飯國有佳子 (大東文化大)

コメンテータ： 三木 英 (大阪国際大)

司会： 小松加代子 (多摩大)

マジョリティの目には捉えられず、決して映らなかった宗教的景色を描き出すこと。それがこのパネルの目的である。意識して「見る」ことでそこにどんな景色がたち現れるのだろうか。本パネルは「最多のマイノリティ」と言われる女性の多様な視点と彼女達の宗教実践によって公認宗教や伝統宗教を照射し返し、それにより宗教研究を一層の厚みと多様性を持つものとして、再構築するためのひとつの試みである。

宗教は一方では女性を排除し他方では取り込もうとするといわれるように、女性にとって解放と縛りの両義的な意味をもつ。さまざまな社会において、女性は民族や国家の独自性や精神的本質を貯蔵する象徴であるかのようにみなされ、ヴェールやサティなどの慣習の是非をめぐる議論は複雑化してきた。これらを男性による女性支配の刻印と見る一部の西洋のフェミニストに対して、そのような見方こそが非西洋女性の主体性を軽んじるコロニアリズムや帝国主義の産物である、という反論が当事者である女性からなされ、またそれらの慣習を伝統的な文化であると擁護したい男性は、フェミニズムを西洋に特有の人権論にすぎない、と排除してきた。このような異議に対して、西洋のフェミニストは、非西洋の女性は自己の権利や平等を主張できず、フェミニズム運動の主体にはなりえない、という判断を下す。その一方で、ナーラーヤンが指摘するように、西洋人フェミニストのなかには、人種主義や植民地主義と非難される危険をおそれて、非西洋の女性と文化に対する否定的見方や道徳的批判を避けようとする文化相対主義的な立場がある。あるいは、自己が属する文化を少しでも批判すれば、西洋の帝国主義的な視点に同調する「文化的裏切り者」とよばれるのではないかと恐れる非西洋社会のフェミニストも存在する。しかし、このどちらの立場も、女性が経験する現実の暴力や搾取の問題に沈黙することによって、結果として家父長制的な差別構造の現状維持に加担することにつながる。「女性」というカテゴリーが様々な差異を内包することが明らかになっている現在、フェミ

ニズムの論争や闘争は多様な形をとる。このような状況下で女性の宗教的実践に関して、どのような解釈が可能なのだろうか。これまでフェミニスト人類学は、女性の文化的実践が価値の低いものとみなされ理論化されてこなかったことを問いただしてきた。標準とされてきた解釈への批判とその解釈の見直し、また学問の制度の再構築などもふくめて、日本人の女性人類学者が寄与できる解釈や分析とはどのようなものだろうか。本パネルでは、エジプト、インド、ミャンマーをフィールドとする女性人類学者たちが、宗教研究の新たな地平をさぐっていく。

宗教概念／宗教研究のグローバル化に関する比較研究

代表者： 鶴岡 賀雄

宗教研究における制度と知

鶴岡 賀雄 (東大)

国際学会誌の「宗教学」なるもの—知のヘゲモニーか適者生存か—

藤原 聖子 (東大)

「宗教」から「宗教事象」へ—フランスの宗教研究の動向から—

伊達 聖伸 (上智大)

「宗教学」の不在とサーサナー(宗教)—タイにおける宗教研究—

矢野 秀武 (駒大)

コメンテータ： 外川 昌彦 (広島大)

司会： 鶴岡 賀雄 (東大)

本パネルは、2010～2012年度科研費基盤研究(B)「宗教概念ならびに宗教研究の普遍性と地域性の相関・相克に関する総合的研究」の研究分担者が、その研究の成果を総合的に報告し、展望を示すものである。

この研究は、西洋近代に誕生したとされる「宗教」概念と宗教学の、世界諸地域でのグローバル化プロセスを解明することを目的としたものである。西洋アカデミズムにおいて「普遍的」と目された「宗教」概念と宗教学は、非西洋社会においてどのように受容されたのか、西洋の影響を受けつつも各地域独自の宗教伝統に基づく宗教概念と宗教研究が現れてきているのかどうかをサーヴェイし、普遍的な宗教研究の可能性と、地域独自の多様な宗教研究の可能性、さらにそれら相互の翻訳可能性・協働可能性を検討してきた。宗教学をグローバルな視座から語る場合、客観的・科学的な近代宗教学が、護教的・伝統的神学(にあたる土着の宗教研究)にどのように入れ替わり、広がっていくかという論調になりがちだが、本研究はそのような近代主義的進歩史観からは距離を置き、西洋の宗教学も非西洋の宗教研究もそれぞれの歴史的コンテクストの中で、何らかの政治性、社会的機能を持ち、展開してきたところに注目した。それによって、西洋近代の宗教概念・宗教学もまた全く一様ではなく、これを単純化し、日本を立ち位置として批判することの一面性も見えてきた。

この共同研究で対象とした地域・国は10以上に及ぶため、本パネルでは、まず「総論」にあたる総合報告的発表を2つ行ったのち、特に特徴的なケースを2つ、各論として深める。コメントは、人類学という宗教学の外部の立場からなされる。

まず第一発表者の鶴岡は、本共同研究を全体的に振り返り、研究成果をまとめ、それについて分析する。各地域・国の研究成果は、今年3月に報告書の形で発表しているので、それらを比較し、総合的に何がわかったかを論じる。ただし抽象論に終始しないよう、具体的事例にも言及する。

第二発表者の藤原は、本共同研究で担当者がおらず、分析から除外されていたが、ヨーロッパ宗教学では大きな歴史的役割を持つ、オランダ・北欧の宗教学について、IAHRの機関誌NVMENの分析をもとに補足説明を行う。また、共同研究では地域・国別の宗教研究の展開が対象となったが、それらがIAHRのような国際学会の形成にどう関わったかについても概観する。

第三発表者の伊達は、宗教研究が19～20世紀を通して活発であったにもかかわらず、IAHR等には関与が少くないフランスの宗教学が、ドイツ、イタリア、日本等とはどのように異なるのか、その歴史と特徴を概観する。さらに、「宗教」概念から「宗教(的)事象」(faits religieux)概念への移行という現象に注目し、それを宗教研究の展開と絡めて考察を行う。

第四発表者の矢野は、欧米宗教学の影響が薄いタイにおいて、どのような比較宗教研究が行われてきたか、西洋の「宗教」概念が導入されて後、タイの「宗教」はどう定められ、また混乱を生んだかを論じる。タイの伝統的「宗教」概念と、インドなどの周辺国での類似概念の異同、宗教研究・高等教育での周辺国との交流にも論及する。

以上の発表を受けて、コメンテータの外川は、専門である南アジアに関する事例を紹介するほか、本研究が宗教学のみに焦点を当てたことによる独自の発見とその限界をともに指摘する。言い換えれば、本パネルが論じたことは、宗教学固有の問題ではなく人類学にも該当するのか、「宗教」概念の普遍性・地域性を宗教研究のそれに直結させることは何らかの盲点を作り出していないかといったことを議論する予定である。

東洋の宗教思想と井筒俊彦

代表者： 澤井 義次

イスラーム思想と井筒「東洋哲学」

鎌田 繁 (東大)

井筒俊彦における東洋の宗教理解—宗教心理学の視点から—

河東 仁 (立教大)

日本文学と井筒俊彦

若松 英輔 (慶大)

井筒「東洋哲学」におけるインド宗教思想

澤井 義次 (天理大)

コメンテータ・司会： 市川 裕 (東大)

本パネル「東洋の宗教思想と井筒俊彦」(代表者・澤井義次)は、イスラーム学者・東洋哲学者として知られる井筒俊彦の宗教思想を、比較宗教学の視座から考察することを目的とする。井筒俊彦は独自の「東洋」観にもとづく、世界の諸宗教思想の研究によって知られるが、『意識と本質』などの著書において、独自の「東洋哲学」を構想した。今日、彼の東洋哲学は国の内外で注目されているが、井筒「東洋哲学」に関する宗教学的な研究は、世界の宗教の思想構造を解明するうえで重要な契機であろう。

井筒は東洋の伝統的思想テキストを創造的に読むことによって、「東洋哲学」の共時的構造を意味論的に構築しようと試みた。彼はイスラーム思想やユダヤ思想ばかりでなく、インド哲学、仏教思想、中国の老荘思想、日本の思想などの広範囲な哲学思想に取り組んでいた。井筒は「東洋哲学」を構想する中で、東洋の主要な思想を時間軸からはずし、一つの理念的平面に配置しなおすことによって、それらの思想を構造的に包み込む意味連関的な思想空間を創出しようとした。彼は東洋の伝統的諸思想の深みを射程に入れながら、東洋思想の鍵概念をネットワーク化し、伝統的な東洋思想の「共時的構造化」を試みたのである。

本パネルでは、井筒の意味論的な試みとその特徴を明らかにするとともに、井筒「東洋哲学」の現代的意義とその課題について検討したい。パネルにおける研究発表は鎌田繁、河東仁、若松英輔、澤井義次の順でおこない、司会および研究発表に対するコメントは市川裕が務める。

以下、各研究発表のテーマと要旨を記しておきたい。
○鎌田 繁(東京大学東洋文化研究所)「イスラーム思想と井筒「東洋哲学」」

井筒はイスラームの伝統のなかのさまざまなジャンルの思想に広い関心をもっていたが、そのなかで彼がもっとも惹かれたのはイブン・アラビーやスフラワルディーに源流をもつ神秘主義的思想であろう。イスラームの多彩な思想のなかで神秘哲学に着目する井筒の思索の特性を検討し、後年の「東洋哲学」の枠組への展開を考えたい。

○河東 仁(立教大学)「井筒俊彦における東洋の宗教理解—宗教心理学の視点から—」

1978年に再版された『神秘哲学 第二部』人文書院(初出は哲學修道院、1949年)において井筒は、ヘラクレスが内向的沈潜によって、「靈魂の彼岸に」窮極の実在それ自体を *metapsychisches Wesen* として証得したと述べ、「自然の彼岸に」それを *metaphysisches Wesen* として把握しようとしたエレア派と対比させた。本発表では、湯浅泰雄の思想と関連づけながら、これらが「東洋哲学」を理解する上でも重要な概念となることを論じたい。

○若松英輔(慶應義塾大学)「日本文学と井筒俊彦」

1979年、イランから帰国した井筒俊彦にいち早く反応したのは、思想界に属する人々より、文学者たちだった。大江健三郎、遠藤周作、日野啓三などがその典型である。あるいは佐竹昭宏のような日本古典文学の研究者もいる。また、戦前から戦後にかけて『神秘哲学』に結実する思想を井筒が宿そうとするとき、彼に強く影響を与えたのが、文芸誌『白樺』の中心メンバーだった柳宗悦である。これらの人物との交差を考察しながら、井筒における「日本文学」からの、そして、「日本文学」への影響を見てみたい。

○澤井義次(天理大学)「井筒「東洋哲学」におけるインド宗教思想」

井筒は自らが構想した「東洋哲学」において、インド宗教思想の中でも、特にウパニシャッド思想やシャンカラの不二一元論ヴェーダーンタ哲学に注目しながら、東洋の哲学的思惟の意味構造を明らかにしようと試みた。本発表では、井筒のインド宗教思想の意味論的考察を読み解きながら、井筒「東洋哲学」の意味構造とその特徴について考察したい。

ファシズム期における古代理解

代表者： 深澤 英隆

ドイツ民族主義宗教運動における神話表象

深澤 英隆 (一橋大)

ファシズム期の非イデオロギー的宗教研究

松村 一男 (和光大)

反セム・アリア中心主義的「アッシリア神話」をめぐって

月本 昭男 (立教大)

ファシズム期と日本神話

平藤喜久子 (國學院大)

コメンテータ： 竹沢尚一郎 (国立民博)

司会： 深澤 英隆 (一橋大)

本パネルは、ドイツおよび日本のファシズム期における古代世界および古代神話の理解を検討することを目的としている。

ドイツおよび日本のファシズム体制には種々の相違があるが、その政治体制の正統化と国民統合のために、さまざまな形で古代世界の表象や神話的形象が動員された点では共通している。この問題には、ふたつの局面がある。

第一に、国家レベル、あるいは多様な政治・文化運動やメディアにおいて、古代世界や神話の表象が、さまざまな動機と目的とをもって援用された。ファシズムという現代的政治体制は、逆説的にも古代世界と神話世界のイメージを積極的に活用した。

第二に、ファシズム期の文化統制のなかで、宗教研究や神話研究は著しい制限を受けたのみならず、主題の選択から解釈に至るレベルで、そうした体制のイデオロギー的要請に積極的に応じていった。

とはいえ、これらの現象の単純なものではない。ここではアルカイズムとモダニズム、学問性とイデオロギー性に関わるさまざまな動機や志向性が交錯し、競合していると言える。本パネルでは、以下の諸発表を通じて、こうした問題に検討を加えてゆくことにしたい。

深澤英隆の発表は、プレファシズムの現象と目されるドイツ民族主義(フェルキッシュ)宗教運動において神話的表象が果たした役割に着目する。これらの運動においては、思想・芸術表現や儀礼の創出などにおいて、古代ゲルマン神話の表象が非常に頻繁にもちいられた。本発表では、「ゲルマン信仰共同体」(GGG)の創立者であり、思想家・画家であったL・ファーレンクロークのテキストと作品を通じて、ドイツのプレファシズム思想圏における神話理解と神話的表象の機能について論じる。

松村一男の発表は、ナチ政権期のゲルマン神話研究を主題とする。ファシズム期にはゲルマン宗教史研究、ことに戦士結社の研究が盛んとなった。一方で、直接

的にそうしたイデオロギー性はないものの、自ずとそうした主題に目が向いて生まれたと思われる研究もあったが、そうした研究もその主題選択のゆえに、戦後批判を受けることになった。本発表では、その一例として、デュメジルの『ゲルマンの神話と神々』(1938)を取り上げ、その学説史的位置を検討する。

月本昭男の発表では、ナチ政権下で、「セム系」民族により継承された古代メソポタミア文明がどのように理解されたかが、検討される。若き日にナチスに属し、後にアッシリア学の泰斗と目されることになったW・フォン・ゾーデンは、セム系民族の国家アッシリアを、アリア系として理解する立場を打ち出した。本発表ではその著作『歴史問題としてのアッシリア帝国の勃興』(1937)を取り上げ、この書に浸み込むナチスのイデオロギーを検討する。同時に、アッシリア学、ひいては古代史における民族神話の問題にも言及がなされる。

平藤喜久子の発表、「ファシズム期と日本神話」では、ファシズム期の海外における日本神話研究を取り上げる。日本のおかれた国際的な状況は、当然ながら、そのときどきの海外の日本研究と深く関わってきた。本発表では、マックス・ミュラーらの神話学を背景とする、19世紀後半のアーネスト・サトウやチェンバレン、フローレンツなどの日本神話理解と、日本がアジアに進出し、戦時体制に向かったファシズム期における海外の研究者たちによる日本神話研究とが、比較検討される。

コメンテータには、『宗教とファシズム』(2010)の編著があり、ファシズム期の宗教および宗教研究の動向をも研究テーマとする、竹沢尚一郎を迎える。

なお本発表は、科学研究費補助金のプロジェクト、「ファシズムと宗教文化に関する地域・時代比較総合研究」および「海外における日本神話研究の歴史とその現代的意義の再検討」の研究成果である。

宗教研究における講研究の意義と可能性

代表者： 森 悟朗

宗教研究における講研究の意義と課題—講研究会の成果をもとに— 森 悟朗 (國學院大北海道短大部)
近代神社の講的組織—気多講社を事例として— 市田 雅崇 (國學院大)
講を支える「靈験」の原理—善宝寺龍王講の事例を中心に— 阿部 友紀 (東北大)
漁業者の寺社参拝習俗から見た講—三重県南部の事例から— 高木 大祐 (成城大)
信仰・文化・ノスタルジー—筑波山の窟をめぐる人々— 天田 顕徳 (筑波大)

コメンテーター： 佐藤 憲昭 (駒大)

司会： 森 悟朗 (國學院大北海道短大部)

今回、「宗教研究における講研究の意義と可能性」というパネル発表を行ないたい。ここでいう「講」とは、通例、宗教・経済・社交上の目的のもとに結成された集団のこととされている。周知のように「講」という言葉は、法華講などの仏語から始まり、有名寺社への「参詣講」、氏神講・庚申講などの「ムラやマチの中の小集団の講」、漁師の海神講・恵美須講などの「職業に関する講」、さらには無尽講などの宗教性を帯びない「互助的な経済的社会集団」にもその用例は広がり、「〇〇講」「〇〇講社」という集団は、かつて日本に無数に存在していた。「講」は、自治体の居住区域や町内会、氏神—氏子関係等に重層する基礎的な社会集団として、宗教学をはじめ歴史学・民俗学・社会学などから重要な研究対象とされてきた。しかし高度経済成長期以降、現在に至り経済的講はほぼ姿を消し、従来の宗教的講も急激に減少しており、講を対象とした研究も現在は盛んとは言えない。こうした状況を踏まえた上で、本パネル発表では、敢えて宗教研究における講研究の意義と重要性について指摘してみたい。

本パネルの発表者は、講もしくは講的な組織を主な研究対象とする「講研究会」(代表：長谷部八朗駒澤大学教授。2010年以降、計31回の例会を開催)のメンバー5名により構成されており、本発表は同研究会における共同研究の成果に基づいて行なう。また、コメンテーターは、外部の視点からの評価を示してもらうため、講研究に高い見識を有する佐藤憲昭氏を迎える。

森は全体の司会進行も兼ねる。研究発表においては、本パネルの趣旨説明を兼ねて、講研究会における取組と研究成果を紹介しつつ、宗教研究における講研究の意義と課題を提起する。

市田発表では、国幣社の講社を事例として取り上げる。官国幣社の講社組織の研究は、先行研究が少ないが、近代日本の社会と神社の関係を考えると、欠くことができない重要な研究対象である。

阿部発表では、現在も広範かつ活発に活動している

山形県鶴岡市の善宝寺龍王講の事例に注目する。龍王講では、寺院守護神であると共に漁業を守護する龍神が祀られている。この龍神によって講員に与えられる現世利益の「靈験譚」に注目することで、講の「結集の原理」を再考する。

高木発表は、漁業に携わる人々による寺社参拝習俗を取り上げる。漁業に関する信仰は、ムラの神社や小祠から、著名な寺社に至るまでの広がりを持ち、複合的になる傾向がある。講による参拝もその複合性の中に位置づけられる。本発表では三重県南部を事例として漁業者の信仰のあり方を取り上げ、講研究の中で講の周辺にある信仰、「講的なもの」へと目を向けていく意義を考える。

天田発表では「筑波山神窟講」の活動に注目する。神窟講は、「筑波山禅定」と呼ばれる登拝修行を毎年8月下旬に行なう講組織である。本発表では筑波山禅定へのフィールドワークを通じて得られた知見をもとに、筑波山神窟講の現況を分析し、現代における講組織のありようの一端に光を当て、さらに現代日本の宗教研究において講研究が持つ一定の意義と多くの可能性について言及する。

上記5名の発表ののち、佐藤のコメントを受け、討議する。その後、可能なかぎりフロアとの質疑応答の時間を取り、宗教研究における講研究の意義と可能性について、積極的に議論を展開したいと考えている。

生殖をめぐる問題と宗教—日中韓の事例から—

代表者： 小林奈央子

中国・西双版纳タイ族からみる出産儀礼とジェンダー 磯部 美里 (愛知大)

中絶問題の背景にある宗教と社会—1970年代韓国を中心に— 金 律里 (東大)

女性と「聖域」をめぐる言説の変容に関する一考察 小林奈央子 (愛知学院大)

コメンテータ： 絹川 久子 (ルーテル学院大)

司会： 小林奈央子 (愛知学院大)

女性の出産は、新たな生命を生み出す崇高な営みであり、命がけでおこなう行為として尊ばれ神聖視されてきた。しかし、その一方、出産は出血を伴う不浄なものとなれ、産婦が一定期間、忌として「聖域」とされる場への立ち入りを禁止されたり、さらには、出産や月経といった生理現象を有する女性そのものを恒常的に不浄とみなす見方も生んだ。また、出産は、出産する女性個人や家族だけのものではなく、所属する社会とも深いかわりをもち、そのあり方に強く影響される。そして、こうした女性の出産・生殖機能に付随する現象に対して向けられる禁忌や不浄観、社会的要請は、男性、あるいは宗教に影響を受けた家父長的な思想によって、形成され、強化されることが多い。本パネルでは、宗教に起因する家父長的な思想や社会のあり方が、女性の出産や生殖に関わる現象に対しいかなる影響を与えてきたか、日本、中国、韓国での事例を通し考察を試みる。

まず、磯部美里が、「中国・西双版纳タイ族からみる出産儀礼とジェンダー」と題し発表をする。社会から分離され、過渡期を経て、統合されるという通過儀礼の特徴が出産にも見られることはこれまで指摘されてきた。この時期、出産した女性は社会的に特別な存在として見なされ、多くの義務や禁忌が課せられるが、これらの義務や禁忌には当地の信仰宗教や規範が大きく影響している。そこで、本報告では、中国の少数民族に数えられるタイ族の過渡期にあたる産褥期ならびに統合にあたる名付け式を事例として、女性たちに課せられる義務や禁忌について取り上げるとともに、統合儀礼においていかなるプロセスがみられるのかについて考察する。上座仏教を信仰するタイ族において、宗教規範に基づく男性中心的社会構造がいかに出産儀礼にも影響を及ぼしているのかについて検討を試みる。

次に金律里が、「中絶問題の背景にある宗教と社会—1970年代韓国を中心に—」と題し発表する。中絶問題は胎児の生命権と母の選択権との衝突としてよく論じられるが、韓国において妊娠と出産は女性「個人」の出来事ではなく、家族そしてその家族が属している社

会と深くかかわっている事柄として認識される。また、生まれてくる子供も「個人」であると同時に家族そして社会の一員として、家族と社会のため何らかの役割を果たす存在として認識される。そして、中絶問題をめぐる個人・家族・社会との関係は、当該社会の胎児観、生命観、人間観などの宗教文化と影響し合っている。本発表は、母子保健法が制定され国家主導の家族計画が実行され始まった1970年代韓国の状況を通して、中絶をめぐる個人・家族・社会との関係と中絶問題における儒教や仏教、キリスト教などの宗教的影響について考察する。

最後に小林奈央子が、「女性と『聖域』をめぐる言説の変容に関する一考察」と題し発表をする。日本において、女性が宗教的に「聖域」とされる場や行事から排除されることの理由の1つとして、歴史的には女性の生殖機能にかかわる血の穢れがしばしば挙げられてきた。しかしながら、昨今は、血の「穢れ」ということを前面に出さず、女性の身体的な負担や「特性」に配慮するがゆえに男性とは異なる制限を設けていると宗教集団内で説かれることがある。ここでの問題は、穢れとみなされることはなくなっても、女性は聖なる場や機会から引き続き排除されており、新たな理由づけも、ほとんどの場合、集団内の男性宗教者によってなされているということである。「聖域」への女性の関与を制限する言説の変容と、変容しながらなおも保持されていく状況について考察する。

史料から見た近世・近代移行期の神職

代表者： 山口 剛史

史料から見た伊勢神宮禰宜の叙位過程

石川 達也 (戸田市立郷土博物館)

矢野玄道と伯家神道—『伯家問答』から見た鎮魂祭—

山口 剛史 (皇學館大)

史料から見た復興神祇官

三ツ松 誠 (東大)

明治維新时期の神道教師—井上正鐵門中の史料を通じて—

荻原 稔 (都立青峰学園)

コメンテータ： 松本 久史 (國學院大)

司会： 松本 丘 (皇學館大)

本パネル発表は『史料から見た近世・近代移行期の神職』と題し、4名の発表者が下記の内容でおの報告を行うものである。司会は垂加神道研究者の松本丘が、また、コメンテータは国学史研究者の松本久史が務める。両者は、いずれも当該分野の代表的な研究者であり、近世・近代移行期の宗教史における神職の実態究明について、各発表者の報告に対して、専門的な見地から意見を述べる。

石川達也は、「史料から見た伊勢神宮禰宜の叙位過程」と題し、伊勢神宮の神職、特に近世期の禰宜がどのような手続きを経て叙位されたかを数例の事例を通じて報告する。近世期の神宮の制度については、伊勢信仰研究や宇治・山田の都市研究などの面における権禰宜(御師)層が近年研究の対象とされている。それに比して禰宜を中心とする神宮の組織実態については未だ不明な点が多いと思われるため、本報告では位階という観点から検討を試みる。なお発表者はかつて、天明朝の禰宜の位階に着目し、その上昇が全国的な神職増加の影響によるものであることを考察した。今回の報告ではこれをさらに進め、新例の場合や時代による変化が見られるのか、またその場合の特徴などについての分析を試みたい。

山口剛史は、「矢野玄道と伯家神道—『伯家問答』から見た鎮魂祭—」と題した発表を行う。幕末・維新时期の国学者矢野玄道は、伴信友に考証学を学び、平田篤胤の没後門人となった人物である。玄道は、文久3年(1863)に神祇伯白川家学師となり、神祇官再興建白書を代筆してもいる。また、慶応3年(1867)には吉田家学頭となり、結果として、両家の神道を復古神道に転換させる原動力ともなったことで知られる。この玄道が文久3年から翌年にかけて述べたのが、『伯家問答』上下巻である。その下巻の前半を占めるのが、鎮魂祭に関する内容である。そこで、今回の発表では、玄道と伯家神道・鎮魂祭について、本史料を通じて具体的に検証して報告したい。

三ツ松誠は、「史料から見た復興神祇官」と題して報

告する。近年めざましい発展を遂げた近世宗教社会史研究は、神社・神職の分析における本所論的視点を不可欠のものとした。他方、天皇の下での祭政一致を掲げた維新政府における神道の位置付けに関しては膨大な研究の蓄積があるものの、それに比べれば、旧来の神職にとって維新変革が如何なる経験だったのかと問うケースは稀である。そこで両研究動向のあいだの断絶を埋めることを目指して、本報告は、『復古記』原史料などの分析を通じて、本所論的視点を導入しつつ、同時代の神職にとって神祇官の再興、ひいては近世近代移行期の宗教地形の変動が、如何なる意味を持ったのか、粗描することを試みる。

荻原稔は、「明治維新时期の神道教師—井上正鐵門中の史料を通じて—」と題して発表する。慶応年間から明治初頭は、大きな変化が相次ぐ不安定な情勢であったが、幕府による度重なる取締を加えられてきた井上正鐵門中(後の禊教)にとっては、むしろ好機到来というべき時期だった。だが、明治3年(1870)の大教宣布の詔により神道教化の方針が示され、神祇官や宣教師が設置されたものの、民衆教化の布教現場にとっては実効性が乏しく、更に明治4年(1871)の家職の返上により本所を失うことになって、かえって不安定な立場に立つことになった。本発表では、明治5年(1872)の教導職設置による布教の公認に至るまでに、教師たちがどのように行動したのかを史料を通じて具体的にみていくことで、教派神道成立に先立つこの時期の位置を考えてみたい。

以上、各発表者が報告する「史料から見た」様々な事例を通じて、この時代の神職・国学者の実像をより明らかにすることを試みる。そして、彼らに変容する社会や文化の発展にどのような影響を与えていたのかを検討したい。また、変革期における彼らの幅広い活動内容を検証し、それぞれが属する社会で自己の相対するものと如何に濃密な関係を構築していたかも再確認したい。

近現代日本の民間精神療法の展開

代表者：	塚田 穂高	
宗教・医療・精神療法—昭和戦前期における差異化の言説と困難—	平野 直子	(早大)
瞑想における姿勢の要求と身体観	野村 英登	(二松學舎大)
岡田式静坐法の応用例—昭和初期『静坐』誌を資料として—	栗田 英彦	(東北大)
新宗教の発生・展開過程における「精神療法」の位置	塚田 穂高	(國學院大)
「精神療法」の医療化—スピリチュアル・セラピーの分析から—	ヤニス・ガイタニディス	(千葉大)
コメンテータ：	對馬 路人	(関西学院大)
司会：	塚田 穂高	(國學院大)

本パネル「近現代日本の民間精神療法の展開」は、平成24年～27年科学研究費基盤研究(C)「近現代日本の民間精神療法に関する宗教史的考究—身体と社会の観点から—」(研究代表・吉永進一)と連動して企画されたものである。

従来、「宗教と心理療法」といった問題設定はしばしばなされてきたが、その理解に際しては、一方の極に既成宗教や新宗教といった「宗教」という制度化されたシステム、他方の極には精神医学が布置されるという枠組みが用いられてきたことを指摘できるだろう。

しかし、近現代日本においては「宗教」ではないものの「宗教的」といえるシステムが数多く存在し、展開してきた。たとえば、「修養」「呼吸法」「健康法」「精神療法」「霊術」「癒し(ヒーリング)」「スピリチュアル・セラピー」と呼ばれる実践がその例として挙げられる。これらの実践については、すでに井村宏次の『霊術家の饗宴』(1984)や西山茂の「〈霊=術〉系新宗教」論(1988)以降、島菌進、弓山達也、田邊信太郎らによる研究の蓄積があったものの、その後は個別のトピックに関する研究が主となり、その歴史全体を視野に入れた上での研究が十分に展開されたとは言いがたいだろう。

だがそもそも、Janine Sawadaが*Practical Pursuits*(2004)で指摘したように、すでに近世には呼吸法のような身体技法や道徳的な修養などが一体となった宗教的文化が広く存在していたのであり、それらは宗教と医学のような制度化されたシステムと緊張関係をはらみつつも、近代においても絶えることなく第三の極を構成してきたのである。そのような歴史を有することを鑑みると、こうした文化は、「信仰に対する迷信」「合理に対する非合理」といった単なる近代化に対する反動として捉えられるべきではないだろう。近代におけるその第三の極(ここではそれらを「民間精神療法」と総称しておくが)とは、「身体と精神」「宗教と世俗」「合理と非合理」「個人と国家」といったカテゴ

リーをやすやすと越えて、一元的な心身(さらには国家・世界)の救済を目指していた領域であったのである。またそこには、さまざまな思想と技法が集積しており、19世紀欧米思想や20世紀後半以降のニューエイジ運動などのグローバルな諸潮流・展開とのつながりなど、流動的な様相が確認できるのも特徴と言える。

こうした問題意識に立脚し、近現代日本の民間精神療法における身体文化と流動性に留意しながら、その系譜と意味を解明していこうというのが、われわれの研究の目指すところである。第1回の研究発表となる本パネルでは、現代にいたる民間精神療法的文化の広がりやを明らかにし、その身体文化の問題に焦点を当てつつ、問題提起をしていきたい。平野報告では、昭和戦前期における「宗教」「医療」「精神療法」の差異の語られ方を題材に、それら三極の関係について論じる。野村報告と栗田報告では、どちらも瞑想・坐禅の身体技法に焦点をしばり、前者はその広がりや方法の比較を、後者はその歴史のなかでの展開例を扱う。塚田報告では、日本の新宗教のなかに精神療法的な実践が広く存在するのみならず、その発生・展開にこうした実践の文化が大きく関わっている事例を論じる。ガイタニディス報告では、比較的近年のスピリチュアル・セラピーの実践者の量的・質的分析に基づき、その実践の分節化と語りの医療化について明らかにする。

雑誌メディアからみた近代宗教史

明治仏教史における雑誌と結社
キリスト教メディアの近代
地方神職会会報からみる近代神道史
英文仏教雑誌に見る東西の「対話」

代表者： 大谷 栄一
大谷 栄一 (佛教大)
星野 靖二 (國學院大)
藤本 頼生 (國學院大)
吉永 進一 (舞鶴高専)
コメンテータ： 石井 研士 (國學院大)
司会： 大谷 栄一 (佛教大)

(1) 本パネルの位置づけ

発表者たち(大谷・吉永・藤本・星野)は、2011年4月より、共同研究「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」(代表者：大谷、科学研究費補助金・基盤研究(B)、2011-2014年度)のメンバーとして、近代日本宗教史に関する調査・研究を進めている(現在、メンバーは24名)。

本共同研究の目的は、近代日本宗教に関する一次資料のアーカイヴを整備し、それらの資料を分析した上で、近代日本宗教史研究の進展に貢献するための基礎研究を行うことである。この目的を実現するため、現在、仏教系と神道系雑誌の目次データベースの作成作業を行うとともに、近世・近代の仏教系出版文化と国際的な仏教ネットワークに関する資料の調査・研究を実施している。

本パネルは、この調査・研究の中間報告というべき位置づけを持つ。

(2) 本パネルの目的

本パネルの目的は、雑誌メディアに注目して、近代日本宗教史を捉えなおすことである。いわば、近代日本宗教史のメディア論的分析を試みたい。

近代以降、「宗教」に関する知識や学知を伝えるための重要なメディアとして雑誌がある。仏教界では『官准教会雑誌』(明治7年4月創刊、明治8年8月に『明教新誌』に改題)、『報四叢談』(明治7年8月創刊)、キリスト教界では『七一雑報』(明治8年12月創刊、明治16年に『福音新報』に改題)や『六合雑誌』(明治13年10月創刊)等が明治初期に創刊されている。また、英文仏教誌 *Bijou of Asia* が明治20年には早くも創刊され、雑誌を介しての海外との交流も開始している。

以降、続々と宗教雑誌が刊行され、明治30年代以降には、印刷技術の革新によって、大量部数の雑誌刊行も可能となり、神道界では『全国神職会会報』(明治32年8月創刊)や内務省神社局の外郭団体である神社

協会編の『神社協会雑誌』(明治35年3月創刊)なども刊行されるなど、宗教雑誌の社会的な影響力も強まった。

こうした雑誌メディアが各宗教の知識や学知をどのように伝え、また、雑誌メディアを媒介としたコミュニケーション・パターンが仏教界・神道界・キリスト教界のあり方や「仏教・神道・キリスト教と社会」の関係をどのように変えたのか(あるいは変えなかったのか)、仏教界の国際交流がどのように展開したのかを検討する。

(3) 発表者の報告内容

各発表者の報告内容は、以下の通りである。

大谷報告：本共同研究「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」で収集した明治期創刊の仏教雑誌約900点のデータにもとづき、明治仏教史における雑誌と結社の意義を再検討する。

星野報告：近代日本におけるキリスト教メディアの展開を概観した上で、これまでの日本キリスト教史研究においてメディアの問題がどのように捉えられ、活用されてきたのか、また資料へのアクセス等を検討し、今後の課題と展望について述べる。

藤本報告：本共同研究で現在、雑誌の収集、デジタル化を進めている各府県の地神職会の会報の記事に基づき、近代神道史研究における地方神職会の動向と全国神職会との関係性等を検討することで、近代における神社・神職の動向や社会的活動、公共性などの観点を再検討する。

吉永報告：本共同研究で発掘された *Mahayanist* 誌をはじめとして、戦前日本で発行された英文仏教雑誌において、どのような形の対話が行われたかを追う。

今回、仏教、キリスト教、神道それぞれの雑誌に関する報告を行うことで、近代日本宗教史に関する新たな研究視点や知見をもたらすことをめざしたい。

浄土真宗におけるソーシャル・キャピタル

代表者： 長岡 岳澄

寺院の現状と地域社会との関係	長岡 岳澄 (中央仏教学院)
真宗寺院の住職家族がもつ役割とソーシャル・キャピタル	横井 桃子 (阪大)
ビハーラ活動を支えるソーシャル・キャピタル	坂原 英見 (浄土真宗本願寺派総合研究所)
心理学からみる浄土真宗のソーシャル・キャピタル	伊東 秀章 (龍大)
浄土真宗における信仰と社会実践	菊川 一道 (浄土真宗本願寺派総合研究所)
コメンテータ・司会：	藤丸 智雄 (浄土真宗本願寺派総合研究所)

宗教／寺院を中心とする人びとの繋がりや社会的意義を明らかにするため、浄土真宗におけるソーシャル・キャピタルを検討した。本発表は、2009年9月に行った浄土真宗本願寺派寺院の全数調査である宗勢基本調査と2012年8～9月に行った寺院におけるソーシャル・キャピタルに関するインタビュー調査を、真宗学、社会学、心理学の立場から宗教の社会的意義について検討した結果のまとめである。

長岡岳澄「寺院の現状と地域社会との関係」

寺院、特に浄土真宗本願寺派寺院の現状と地域社会との関わりについて、本願寺派において2009年に実施された第9回宗勢基本調査の結果から明らかにする。本パネル発表においては、浄土真宗本願寺派の寺院について取り上げられるが、同じ宗派の寺院であっても地域によって、その環境、実態は大きく異なっている。本発表では、本パネル発表に関連する地域の寺院が、他の地域と比較してどのように位置づけられるかを、特に寺院と地域社会との関わりという点に着目して見ていく。

横井桃子「真宗寺院の住職家族がもつ役割とソーシャル・キャピタル」

布教・伝道や教化などの宗教活動、祭りや文化教室に代表されるような地域に開かれた社会的活動など、寺院を中心とするさまざまな活動をおこなうには、そこに集まり協力する複数の人々の存在が不可欠である。それにもかかわらず、これまでの研究は、活動主体とされる住職などの宗教者に限定されているものがほとんどであった。そこで本研究では、これまで周辺的な存在として見落とされてきた住職の家族に着目して、彼らが寺院においてどのような役割を果たし、彼らのどのような活動が門信徒や地域住民とのつながりを作りだしているかを、住職家族に対するインタビュー調査から検討する。

坂原英見「ビハーラ活動を支えるソーシャル・キャピタル」

「ビハーラ」は、サンスクリット語で僧院などを指し、「安住・休養の場」を意味する。この意味から、終

末期患者に対する仏教の各種支援活動などを指す言葉として用いられている。本発表では、ソーシャル・キャピタルの視点に基づき、ビハーラ活動が支えられ発展する要因を、インタビュー調査から検討する。今回調査対象であった限界集落を多く含む山間地域では、早くからビハーラ活動への取り組みが進んできた。ビハーラ活動者が展開してきた理由を、各支援者における精神的、社会的背景から検討する。

伊東秀章「心理学からみる浄土真宗のソーシャル・キャピタル」

浄土真宗寺院を中心としたソーシャル・キャピタルについて調査した結果を心理学の観点から検討した。浄土真宗寺院を中心とする日本独自のソーシャル・キャピタルは、コミュニティ心理学の観点からは、精神福祉の領域として注目される。浄土真宗寺院におけるソーシャル・キャピタルの調査結果から、寺院関係者や地域の人々が、寺院に関する集会によってより親密になる特徴があった。この関係性は、社会資源としての役割と考えるならば、社会・対人的に肯定的な資源となる。また、生死の問題などターミナル期の問題に対する社会資源として、浄土真宗寺院は特有の意義がある可能性がある。

菊川一道「浄土真宗における信仰と社会実践」

宗教において、「教義」と「実践」はいかなる関係にあるのだろうか。信仰に生きる人びとが様々な活動を行うとき、しばしば、自身の依り所となる教説に対して問いかけを行う。その問いを通して、教義が活動の方向性を規定し、推進力となることもあるだろう。また、そうでない場合も当然あり得る。浄土真宗において、教義と実践の問題は、これまで主に教義的側面を中心に研究が蓄積されてきた。一方、その教えを享受する人びとに関する研究は、未だ充分とは言い難い。信仰に生きる人びとにとって、実際に様々な活動を行う際に、真宗の思想はどのような位置に存在するのか。本発表では、浄土真宗における教義と社会実践との関係について、検討を行う。

宗教表象論再考—近現代日本における表象主体／客体の検討から—

代表者： 茂木謙之介

John Russell Young が描く天皇像—表象する主体の自己規定から— ファクンド・ガラシーノ (阪大)

皇族を神に祀る—秩父神社における秩父宮神格化をめぐる— 茂木謙之介 (東大)

“在るべき霊場像”の生成—60・70年代の恐山をめぐる— 大道 晴香 (國學院大)

読みの運動とは何か—協働表象(論)を再考する— 永岡 崇 (南山宗教文化研究所)

コメンテータ： 川村 邦光 (阪大)

司会： 茂木謙之介 (東大)

本パネルの目的は、近代日本における様々の宗教表象を検討することによって、宗教学における表象研究の可能性を探ることにある。

表象研究は、対象となる表象を読み解くという方法によって、従来の固定化した様々の研究領域を横断しつつ、お互いの研究領域に影響を与えてきており、宗教学分野においても近年表象研究の成果はとみに厚くなっている。

しかし、その領域横断を謳った表象研究においては(同じく領域横断の学である1990年代以降のカルチュラル・スタディーズなどと同様に)、ある定型化した問題設定および結論が複製される、一種のマンネリズムが出来ているのもまた事実である。それは例えば、表象研究においてしばしば指摘される表象行為の権力性・侵犯性・不可能性へのまなざしと、それ自体に対する批判的な視角および評価などである。これは同じく表象研究を採用した宗教研究においても生まれる問題であると言えよう。

本パネルでは、このような表象研究をめぐる状況を相対化し、その可能性を探るため、近代日本における宗教表象を対象として、①表象主体／客体の分節化とそこに展開される論理への注目や、②表象の解釈主体によって任意になされる一元的な解釈への疑義、そして③表象研究においてある種のアポリアをはらむものである実証との関係性の再構築などの視角を共有しつつ、考察を試みたい。

まず、ファクンド・ガラシーノは1879年、グラント前アメリカ大統領の随行書記として来日したジョン・ラッセル・ヤングが著した旅行記・*Around the World With General Grant*に見られる日本表象、とりわけ天皇表象の両義性の問題を、表象する主体の自己規定という観点から考察する。神秘的で聖なる他者、「Mikado」を祖国の読者に提供し、欧州諸国との差異化を図りながら、そうした神聖なる存在がアメリカ前大統領をもてなす意義を語るヤングの記述を手がかりに、他者の陰で自己を規定しようとする主体の問題が新たな次元

で現れるだろう。

次に茂木謙之介は1953年の埼玉県秩父神社における秩父宮雍仁親王の神格化を事例に、戦後地域社会における皇族表象について、戦前との連続性を参照項として考察する。地域と関わりのあった皇族の死によって皇室との所縁の分断可能性の危機が出来た時、地域住民とりわけ行政をはじめとする地域の有力者(地域エリート)はどのように行動し、皇族表象を生成したのか、その際に皇族関係者は如何に関わったのかを問うことによって、宗教表象形成における様々の主体のインテンションが明らかとなるだろう。

また大道晴香はマス・メディアによって形成された〈恐山イタコ〉という大衆的表象の展開に着目し、この表象が受容者の消費(投影)行動を通じて霊場恐山にもたらした変化、ならびに変化を受けて恐山菩提寺が提示した霊場の“在るべき姿”を問うことで、「聖」の領域における自己像の生成を「他者の眼差し」との関係から捉える。受容者を介した他者表象の実体化と、「他者の眼差し」の実体化に伴う自己表象の再編という一連の“運動”は、宗教表象が有する動的側面に光を当てる試みとなるだろう。

これらの報告にみられるような、ある種の宗教的資源をめぐる多様な主体による表象の営みは、宗教史叙述の枠組み全体の根本的な再考を促すものではないだろうか。永岡崇による最後の報告は、宗教運動の当事者とその観察者とによって葛藤を孕みながら構成される共同性のありようを理論的に検討し、新たな宗教(文化)史研究の展望を切り開くことを目指す。

ディスカッサントには川村邦光を迎え、討議を行う。

こころの医療と宗教—慈悲と支配をめぐる—

代表者： 戸田 游晏

懺悔と慈悲—ゆるしについて—

杉岡 信行 (近大)

護摩祈祷における修法者のこころの変容—縁起と共時性—

妹尾 諭 (大阪経済大)

Scientology から見る「反精神医学」の宗教性

戸田 游晏 (宇部フロンティア大)

一つ掲げとムジナの罠—こころの医療の近代—

實川 幹朗 (姫路獨協大)

コメンテーター： 津城 寛文 (筑波大)

司会： 實川 幹朗 (姫路獨協大)

今日の医療は、宗教と同源・不可分であった自らを忘れていたかのようだ。30年前 I. Illich が警告した「医療化」社会が到来し、ホリスティック医学・スピリチュアル・ケア理念導入による再構築が一部では試みられつつも、近代医学と結ぶ世界資本の政治・経済的支配の桎梏から、日本の医療は解き放たれていない。高度情報社会に在って個のリテラシーの純化とからだの声に耳を傾けることを阻むのは、我知らず思考停止へと導かれる、永く注入され続けた近代科学合理主義の habitus/暗黙知である。だが歴史を遡れば、医療は仏教・仏道と俱に渡来し、国の制度に導入され、四箇院・光明子伝承を残し、薬師信仰が広がり、「医は仁(儒者の術)となる近世以前には僧形の者が担う職域であった。

第一発表者杉岡信行は共著『宗教と実践』(2008)で、ジャイナ教と仏教における「慈悲」を取り上げた。ジャイナ教・仏教以前の慈悲は神の業であったが、以後の慈悲は人と人また多様な生き物との共存・共生の実践そのもので、それは「何ものをも支配しないこと」である。(支配)は、煩惱による主体の支配をいう。煩惱に支配されない慈悲の医療と、ナイチンゲール誓詞等善なる神が続べ支配する倫理との異なりは何か。さらに「ゆるし」への検討を加え、探究を深める。

妹尾諭は心理臨床を学ぶ僧侶で、高野山真言宗護摩祈祷修法者のこころの変容機序を自験例を含め報告する。護摩祈祷の場では、修法者と祈願者相互に心身の変容が体験される。不動護摩で煩惱が焼き尽くされ、不動明王・修法者・祈願者が結ぶ慈悲の縁にあって、不幸の原因や病いの本態への気づきが起こる。護摩祈祷という(治療)を考える枠組として、仏道の因縁・縁起と共時性(C. G. Jung)とが如何に重なりまた異なるのか、解明を試みる。

次に戸田游晏は、世界的に教線を広げる新宗教 Scientology が提唱する“Dianetics”(自己啓発・相互カウンセリングメソッド)への評価を試みる。向精神薬害サイバインナーの中には精神科医全般への強い忌避感

を申し立てる人が少なくなく、心理職もまた甘言を弄し精神病院へ送る窓口と断じられる。臨床心理学教育が依然近代医学モデルに準拠することと、これは無関係ではない。向精神薬普及以降「アサイラム(I. Goffman)」は過去の事象と見なされるが、70年代に当事者を代弁した医療者らの運動とは異質な草の根の動きがある。「市民の人権擁護の会(CCHR)」が理念として依拠する“Dianetics”(L. R. Hubbard, 1985)の言説分析を試みると、この「心の科学」の治療メソッドは、プロティスタンティズムと精神分析の融合であり、情報の非対称性(「聴き手」側の優位・独占)・苦悩因子の一元化・唯一一筋の正しい成長発達モデル等、maskedされた一神教(唯一者による支配(一つ掲げ(實川, 2012)))の変奏である。

結びに實川幹朗が、こころの近代を表象する(一つ掲げ)の構造を解説する。近現代医療(臨床医学)は自然科学(基礎医学)に基づき測定可能で再現性・論理的整合性を備えるものと期待されるが、両者の微妙なずれから、昨今頻りに evidence based medicine が強調される。自然科学の因果律に基づく決定論は、単一原因としての神の存在が自然現象の解明に適用されてきたことに由来する。資本主義と同じく、近代医療には一神教の(支配)が浸潤していることが否めない。これが「肉体」を蔑む傾向となり、ロボトミーや電気ショック療法が医療者の善意に基づき盛んに行われてきた。この「善意」と生きとし生けるものへの慈悲との間に、通じ合うものは見いだせるのか。

注入された近代合理主義に導かれ、時に齎される不適切な医療を辛くも脱してさえ、そこに待ち受けるのが「科学」を標榜する閉塞した一元的意識状態であるのなら、それは小泉八雲の(ムジナの罠)に他ならない。

神道の中世的展開を考える

代表者： 佐藤 真人

中世の伊勢齋王についての朝廷対応の変遷

落合 敦子 (國學院大)

伊勢神宮神職の中世的展開

古谷 易士 (國學院大)

中世祇園社の年中行事—神仏習合儀礼の展開—

松本 昌子 (國學院大)

中世神道美術と神道論の歴史的位

三橋 正 (明星大)

コメンテータ・司会： 佐藤 真人 (北九州市立大)

神道の成立の画期には諸説あるが、近年では黒田俊雄の提唱した「中世成立」説が内外の研究者によって受容・展開され、影響力を持つようになってい

事から、平安時代中期から中世にかけての神仏習合の神社の姿を考察する。中世神道を解明するキーワードともなる宮寺の儀礼の変遷を時代ごとに追

最後に、三橋正「中世神道美術と神道論の歴史的位

置ながら、神道史研究にふさわしい時代区分論を提供する。これにより、神道の古代的・中世的な特質が明確になり、その変遷についての議論が活

動化すると思われる。司会・コメンテータの佐藤真人は神道中世成立説を否定し、古代の律令制成立期を神道の成立の画期とする

「中世成立」説の最大の問題点は、中世史を専門とする研究者によって、古代に対する不十分な理解に基づいて唱えられていることである。その意味で、これからの神道史の課題は古代から中世への変化を解明することにある。そこで本パネルでは、古代において神道の成立に最も重要な役割を果たしていた朝廷と神社の関係、有力大社における組織の変質、神仏習合の展開、神道美術・神道説の発生など、神道の中世的展開についての最新の成果をまとめ、そこから神道の宗教的特性を抽出する。

落合敦子「中世の伊勢齋王についての朝廷対応の変遷」では、朝廷・皇室にとって特別な存在である伊勢齋王の中世的変質を考察する。特に、長元四年(一〇三一)の託宣事件を転機として齋王への対応に見直し

がなされ、後朱雀天皇がそれまで女王が続いていた齋王に第一皇女である良子内親王を選ぶなど、一見復古的な傾向も見えるが、内実

公共空間で心のケアを提供する宗教者の養成とその課題

代表者： 谷山 洋三

アメリカのチャプレン教育プログラム

小西 達也 (武蔵野大)

臨床パストラル・カウンセラーの養成

ワルデマール・キップス (臨床パストラルケア教育研究センター)

臨床宗教師の養成

谷山 洋三 (東北大)

コメンテータ： 高橋 原 (東北大)

司会： 谷山 洋三 (東北大)

(1) 本企画の位置づけと目的

東日本大震災以降、宗教者による心のケアが注目されるようになってきているが、国内ではそれ以前からホスピスや病院等で活動する宗教者(チャプレン等)を養成する動きがある。宗教者に期待される心のケアの内容は、スピリチュアルケア、宗教的ケア、グリーフケアが主なものであるが、通常の宗教者の養成課程において、これらのケアのあり方について具体的な訓練は無いに等しい。しかも、現代日本社会では、宗教者が公共空間に無条件に関わることはほとんど不可能であるため、宗教者の側にもケアの知識や訓練だけでなく、さまざまな配慮や準備が必要になる。しかしこのような課題は、臨床家や今回発表する各団体の内部では共有されていても、各団体の垣根を越えて議論されることはほとんどなされていない。

発表者たちは、いずれも公共空間での臨床経験、チャプレン等の養成の経験が豊富であり、宗教者が公共空間で心のケアを提供するための課題をクリアすることについては、細心の注意を払い、工夫と努力を重ね、実績を残してきた第一人者たちである。それぞれの団体での教育プログラムにおいて、この課題について詳細に検討され、教育内容にも反映されているはずである。

今回のパネルにおいては、このような宗教者が公共空間で心のケアを提供するための課題に焦点を当て、宗教者が身につけるべき要件を明らかにしたい。

プログラムを参考に開発され、神道・仏教・キリスト教・イスラーム・新宗教から様々な宗教者が参加している。

以上の3つの取り組みについて、教育目的・方法・特徴を紹介し、相互の議論・意見交換を通して、公共空間で心のケアを提供する宗教者に共通する課題を抽出する。

(2) 各発表者の報告内容

・小西：発表者自身の経験に基づき、アメリカのチャプレン養成プログラム Clinical Pastoral Education (CPE) について紹介する。

・キップス：1998年に設立された「臨床パストラル教育研究センター」は、カトリック精神に基づきつつ、他の宗教者にも門戸を開いており、すでに有資格者約100名を輩出している。

・谷山：2012年に開設された「東北大学実践宗教学寄附講座」は「臨床宗教師研修」を開催し、2013年9月時点で30数名が研修を修了している予定。日本版CPE

過疎地域における宗教ネットワークの可能性—三重県を事例に—

代表者： 川又 俊則

過疎と宗教ネットワークの存続—松阪市飯高町森地区の事例— 磯岡 哲也 (淑徳大)
老人福祉施設で出会う宗教—大紀町・大台町の事例— 川又 俊則 (鈴鹿短大)
祭礼を担うことの不合理—老人たちの島・鳥羽市神島の事例— 板井 正斉 (皇學館大)
子どもたちとともに形成する宗教間ネットワーク—紀和町の事例— 冬月 律 (モラロジー研究所)

コメンテータ： 武笠 俊一 (三重大)

司会： 川又 俊則 (鈴鹿短大)

本パネルは、平成23年度から3年間の計画で行われている「過疎地域における宗教ネットワークと老年期宗教指導者に関する宗教社会学的研究」という共同研究のうち、「宗教ネットワークの可能性の考察」に関する報告である。本パネルの発表者たちは、人口変動による社会構造の変化は、多岐に亘る分野で喫緊の社会問題としてとらえられているが、地域に残る住民、とりわけ高齢者の心の支えとなる「宗教」の言及はほぼ皆無だったことから、自ら調査研究を進めることで、宗教が人びとにとって、どのように意味があるものか考察することにした。同時に、かつて地域社会ネットワークの拠点だった寺院・神社等の宗教施設が、現代、再びその拠点になり得るかどうかについて、三重県内の事例研究のなかで検証していくことにした。この3年間で、三重県内で過疎地域に指定されている10地域すべてで調査を行った。本パネルでは、そのうちの5ヵ所における事例を紹介する。各地域それぞれの宗教集団に見出される事例から、本パネル発表者たちは、一般の人びととの調和が見出せることを予想し、「宗教と一般社会との接点はない」という一般的な宗教理解とは異なる知見が、各地の調査結果から示される。

第1発表で磯岡は、円応教に注目する。対象地区は松阪市西部に位置する山村である。円応教は、昭和31年に伝播、過疎化にもかかわらず着実に浸透し、昭和50年代には信者数が地区人口の1割を越え定着をみた。その後、さらなる高齢化・過疎化のなかで、どのようにして教会のつながりを保とうしているかを、リーダーシップのあり方、地域社会と教会との文化的調和等に着目して報告する。

第2発表で川又は、大紀町と大台町にある老人福祉施設とキリスト教会に注目する。およそ20年前、キリスト教主義精神にもとづく社会福祉法人が老人福祉施設を設立・展開し、外部ボランティアとのつながりもある。利用者が入所後キリスト教と出会い、信仰を持つ事例などから、若い頃の入信以外の老年期にも「出会い」があることを示す。

第3発表で板井は、民俗学において「敬われる老人たちの島」と評されてきた鳥羽市神島に注目する。柳田國男の来島以来、島の祭礼行事で重要な役割を担ってきた高齢者だが、近年その担い方で変化が確認できる。社会構造的な課題の影響を大きく受けていることを推測しつつ、従来の調査研究を振り返り、神島における宗教ネットワークの〈これまで〉と〈これから〉をつなぐ持続可能性を考察する。そこには「不合理」と向き合う〈いま〉が見えてくる。

第4発表で冬月は、熊野市紀和町内に点在する複数教団の活動に注目する。宗教団体間では信仰対象や教理の理解が異なるため、団体間交流は厳しい。だが紀和町では、様々な活動の共通点に子どもの存在があった。地域住民および子どもたちをも巻き込んだ活動は、宗教団体の内外の条件の中で新たなネットワークが形成されていく様相を呈している。これを考察する。

これら4つの発表で、各地域の個別事例が詳しく紹介されるが、仏教・神道・キリスト教・新宗教それぞれの宗教集団が、地域ごとにユニークな取組みを実践していることが示される。本パネルにより、宗教の重要性を鑑みてこなかった従来の過疎地域研究に対して新たな知見が提示できたと言える。

平成 25 (2013) 年 7 月 13 日発行

編集・発行 日本宗教学会第 72 回学術大会実行委員会

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

國學院大學 AMC5 階

E-mail: jars2013team@gmail.com

<http://jars2013.wordpress.com/>